

【園の教育目標】

元気で 仲よく がんばる子 やさしい子・すすんでする子・いっぱいあそぶ子

【令和6年度の園評価より】

- ・令和6年度に引き続き終礼時に振り返りの場をもち、保育者間の連携を図り、翌日以降の保育につながる環境や援助を探る。
- ・友達や保育者など身近な人と挨拶を交わす心地よさを感じ、子どもが自ら進んで挨拶ができるような手だてを工夫する。
- ・保護者に幼児期の「あそび」の大切さを理解してもらえよう、園の遊びや行事などの活動の意図を伝えることを心がける。

4段階評価 ○保育者 ☆関係者 ●課題

観 点	短期目標	自己評価	保護者評価	評価及び意見の概要
保育・幼児教育の充実	健康な体づくり 体を動かすことを楽しいと思えるようになる	3.6	3.9	○園全体で登園後すぐに戸外に出て遊ぶことが習慣となり『げんきタイム』が定着した。 ○他学年が行っている体操や遊びを一緒に楽しむ姿が見られ異年齢交流にもつながった。 ○子どもの興味関心や季節に応じた遊びが楽しめるように職員間で相談したり、アイデアを出し合ったりしたことで、自分の好きな遊びを見つけ夢中になって遊ぶ姿が見られるようになった。 ○十分な遊びの時間を確保することで、体力が付き疲れを訴える子が減り、空腹を感じ給食もよく食べるようになった。 ○縄跳びやコマ回し等の遊びを通して、縄を結んだり紐を巻いたりする経験を重ね、手先を器用に動かす姿が見られるようになった。 ☆元気いっぱい遊び、学年問わず仲良くしているところがよい。 ●天気の良い日は戸外での『げんきタイム』などの活動や遊びを継続して行い、援助や支援の内容やタイミングを図り、子どもの身体的な育ちを支えていきたい。
	社会的発達 身近な人に親しみをもって挨拶や話をする	3.5	3.5	○保育者が登降園時に一人一人に笑顔で挨拶を繰り返すことで、相手に視線を向けて自分から挨拶ができる子や、子ども同士で挨拶を交わすようになった。 ○身近な大人（保護者や保育士）の姿を見聞かし、その場にあった挨拶や言葉を知り、話してみようとする姿があった。 ○遊びの場だけでなく、当番活動やクラスの話し合いなどの機会を通して、友達の話や話を聞くことや、会話をする楽しさが味わえた。 ☆遊具の取り合いになったときに「あとで貸して」と言えたり、「ありがとう」「ごめん」の言葉が自然と出たり、子ども同士がよい関わり方ができている。 ●思いを伝えることは得意だが聞くことが難しい子が多いので、思わず耳を傾けたくくなるような話し方の工夫や、聞くことの大切さを機会を捉えて知らせ、聞く力を養っていきたい。
	精神的発達 繰り返し挑戦し、最後までやってみようとする	3.5	3.4	○一年を通して『なかよしタイム』の時間を十分に確保したことで、夢中になって遊び、自分なりに工夫したり挑戦したりするようになり、「明日もしたい」と継続して遊び込む姿が見られた。 ○遊びの展開に応じて戸外、室内、テラス等、様々な場で遊べるように環境設定に努めたことで、子どもの遊びの内容が広がった。 ○その子の思いに共感し、一緒に考えたり、さりげなく援助したりすることで、「もっと〇〇したい」と子どもが試行錯誤しながら遊ぶ姿が見られた。 ☆ただ楽しいだけの保育ではなく、「頑張ることはかっこいいこと」と思える集団になってほしい。 ☆お茶会での子どもの姿から、年齢に応じた適度な緊張を感じることは子どもの心の育ちにとって大切な経験になると思った。今後も継続して行ってほしい。 ●今後も遊びの展開や子どもの育ちに応じた環境、先走ったり行き過ぎたりしない援助を追求して保育の力量を高めたい。
子育て支援の充実	地域・保護者との連携 幼児期の「あそび」の大切さを知らせ、保護者と共に幼児の育ちを確かめ合う	3.5	3.8	○保護者に子どもの園での姿を伝え共有することで信頼関係が深まり、子どもの成長を園と家庭とで支えることができた。 ○園だよりやドキュメンテーションの配信、フリー参観の実施により、園での様々な活動の意図や「遊び」の大切さが保護者に伝わった。 ○クラス担任以外の職員が、保護者にその子の様子や成長した姿を伝えることで、全職員で支えられている安心感や園の保育・教育への理解につながった。 ☆園全体で子どもの名前を覚えて声掛けをしており、温かい環境である。 ☆フリー参観で、楽しく遊んだり、友達と歌を歌ったり、給食もよく食べる等、子どもの様子を見て成長を感じることができた。 ●園からの便りは保護者目線にたち、より分かりやすく、見やすい構成を心掛ける。
資質・専門性の向上	研修・研究 保育が楽しめる職場環境を共につくる	3.6		○他学年（他クラス）の子どもの様子を知ることで、保育者自身が様々な子へ目を向け、声をかけたり一緒に遊んだりすることができ子どもに対する理解が深まった。 ○終礼や職員会などにおいて、他の保育者の思いや意見を聞くだけでなく共感し一緒に考えたり、時には疑問を投げかけたりして、互いの保育力向上に努めることができた。 ●互いの保育を認め合い、理解し合いながら保育者自身の個性を生かした保育ができるように引き続き職員間で連携を図っていく。

【次年度に向けて】

- ・遊びや生活の中で、相手の話を聞くことができる指導、援助の工夫をする。
- ・子どもが試したり、考えたりしながら主体的に遊びを展開、発展させることができる環境構成の工夫をする。
- ・保育者間で互いの悩みを共有し、共に考え語り合い、PDCAサイクルを意識した週案を作成する。